



主体的な態度を育てる歴史学習評価

愛知教育大学 教授 土屋 武志

1. 社会科は暗記？

「主体的に学習に取り組む態度」を評価することが難しい、何かよい方法はないか？と質問されることがよくある。実際に行われている授業を観察していくうちに、この問題の背景が見えてきた。現在行われている社会科歴史的分野の授業の多くは、生徒たちが主体的に取り組むことが前提とされていないのである。学習指導案の学習活動（学習内容・活動）欄に「〇〇について考える」「〇〇について調べる」と示されてはいても、実際の授業ではその活動に挑戦させていないことが多い。そのため、教師が説明し、生徒たちはそれを聞くという受動的活動になってしまう。生徒たちは、このような社会科を「暗記教科」と言う。

2. 生徒たちが主体的に取り組む

歴史学習活動

では、社会科が「暗記教科」ではなく、生徒たち自身が多様な活動に取り組む「実技教科」として考えてみた場合、生徒たちは、どのような実技（活動）に挑戦することになるだろうか。歴史的分野の授業で日々心がけたい基礎的・基本的活動と単元を通じて挑戦させたいプロジェクトに分けて述べる。

(1) 基礎的・基本的活動

例1 教科書から疑問や重要だと考える情報をいくつか見つけて他者に伝える活動。例えば、教科書の中で気になるところ（疑問や重要だと考えるところ）にアンダーラインを引き、ペアあるいはグループ対話で相違点や共通点を発見する。そのとき、自分の発見に関する資料（写真や地図・図表等）を教科書から一つ選び、それと関連させて説明する。教科

書の資料を先に選び、次にそれと関わる本文にアンダーラインを引かせてもよい。これは、生徒それぞれが持つ視点（興味関心）を認め合い、教科書に叙述されている多様な情報を発見する活動である。

例2 授業の終末で、クラスメイト（自分自身も含む）の発言から、生徒自身が記録しておきたい発言（情報）を箇条書きで一つか二つノートに記入し、ペアあるいはグループで対話して、相互にコメントする活動。

紙幅の都合で上述の2つの活動に絞ったが、共通するポイントは、教師が答えを「教えてあげる」授業とは異なり、生徒が自身の意見（仮説）を表現するチャンスがあるという点である。こうした活動を繰り返すことによって、自分の限られた視点とは異なる歴史の見方・考え方があることを知り、それを理解するための基礎・基本となるエンパシーが育っていく。

(2) 単元全体で取り組むプロジェクト

例 生徒自身がこれまで学習した他の単元と比較して説明する活動。例えば、「あなたはタイムトラベラーとして19世紀末の日本を調査し、ニュース記事（新聞やテレビ、SNS）を発信するプロジェクトメンバーに選ばれました。メンバーは4人です。一人一つ分野を選んで調査します。それぞれの調査をもとに、メンバーで話し合っその時代を表すことのできる一つのタイトルを考え、そのタイトルのもと、現代の私たちにも分かるように発信してください。4つの分野は政治外交、産業経済、教育文化、その他（チーム独自の分野）です。なお、このミッションに取り組むため、まず最初に、その前の時代と比較してどのような変化があったか、教科書をもとに事前調査をしてから始めるようにしましょう」のようなミッション（パフォーマンス課題）に単元を通して取り組むプロジェクト型の学習である。

学校の図書室で他学年対象のミニ博物館の展

示を作成するミッション、歴史ガイドブック（ICT機器を用いてWEB上で作成してもよい）や参考書を作成するミッションとして実施することも可能である。単元の最後の1時間ではなく、単元全体を通して作品を仕上げていく点がポイントである。高校段階を先取りして、単元ごとにプロジェクトを運営する実行委員会を生徒たちがつくることもある。

3. 主体的な学習活動を支える形成的評価

生徒が主体的な学習に取り組むためには疑問（問い）が必要であり、取り組みを促進させるためには、『中学校社会科のしおり』2022年度前期号で石井英真氏が明解に述べているように、**形成的評価**（指導を改善し、生徒を伸ばすために行われる見取り）で活動を支える必要がある。生徒が、教師よりも教科書を注意深く読み解いたり、教師が気付かない疑問を発見したりする場合もある。形成的評価は、まず生徒の考えを理解し認めることが基本となる。

例えば、富岡製糸場を例として明治政府の殖産興業政策を学ぶことも多い。このとき、生糸は江戸時代までは高級な輸入品だったが、明治時代には輸出品となったという変化に気付くと、明治の人たちはなぜそのように変化させようとしたのか？という生徒自身の疑問（問い）が生まれる。『社会科 中学生の歴史』（以下、教科書）では、p.114とp.116に、17世紀に生糸が中国からの輸入品だったことが述べられている。またp.135には18世紀の日本国内の工業発展と農村の変化の中で「17世紀に絹織物や^{よらい}鎧の素材となるため輸入が多かった生糸は、桐生（群馬県）や上田（長野県）などで国産化が急速に進み、国内に流通し始めました」と叙述され、さらにp.162には全国に流通するようになった絹織物に注目して大商人が工場制手工業を始めたことが叙述されている。教科書には、これらの叙述をたどって変化を説明することができるように関連図版や関連ページへのリンクが付けられており、それらをつなげていくことで生糸を取り巻く変化に生徒自身が気付いていくだろう。

生徒は教師の講義の聴衆でなく、話す側であって、教師が聴く側となる。教師は、「なるほど」などと理解を示したり、「○○というところが分かりにくいけどみんなが分かるように補足して」など不明確なところを質問したり、また、「この考えをサポートする人、理由などを教えてください」などクラスのチーム化を促す反応を示すことで、生徒たちの学習意欲を高めるようサポートしたい。また、リンクに気付いた生徒が他の生徒にその発見を伝えるチャンスを与えることで、発見者はクラスメイトから「なるほど」とその発見の貴重さを認められ（評価され）て、さらに意欲的に取り組むことができる。教室の掲示コーナーやICT機器を使った教科の情報コーナーなどに「私の発見コーナー」をつくって、歴史学習で発見したことを他者と共有できる（理解し合える）ような環境を整備することも、生徒たち同士の形成的評価の機会を増やすことにつながる。

主体的な歴史学習では、教科書は生徒たちが使う学習ガイドブックと捉えるとよい。教師が重要だと決めた箇所にアンダーラインを引かせた時点で、教科書は教師が使うものに転換してしまい、主体的に学習に取り組む生徒の意欲を減少させる。生徒たちは自分たちの能力を認めていないのではないかと感じ、学習を支えてくれる形成的評価者（＝コーチ）とは見なされなくなる可能性がある。形成的評価者としての教師は、生徒が他の生徒とは異なる見方を提案したとき、どの意見も否定せず、「いまの意見はどうですか？」と生徒たちに問い返しつつ対話を導き、反対ならどう反論するのか、賛成ならなぜ賛成か、それぞれ意見を表明できるように促進（ファシリテート）することが、重要な役割となる。

4. 民主的市民を育てる

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

社会科は、民主的市民を育成することがその役割である。「歴史は過去のことなので変えることはできない」と考える生徒もいるが、過去

のどの出来事をいまの人たちにどう伝えるかという問題は、いまの生徒たちに課されているパフォーマンス課題である。そのとき、中学校で初めて学習することになる欧米の市民革命と産業革命を踏まえた日本の近代学習は、現代の民主的社会を理解するための重要な歴史学習内容である。

教科書p.168～169は、タイムトラベル⑨「明治時代を眺めてみよう」である。このコーナーとp.122～123のタイムトラベル⑧「江戸時代を眺めてみよう」を比較して、生徒たちは多くの気付きを得るだろう。因みに、明治時代には、製糸工場とそこに運ばれている繭とSILKと書かれた輸出用生糸が描かれている（図1）。これとは別にこの場面では、江戸時代とは異なる服装の変化に気付く生徒もいる。ここには全体の約3分の1程度、洋装の人物が描かれている。当然江戸時代には描かれていない服装である。しかもよく観察すると、洋装している人物はほぼ軍人・警官・郵便局員である。明治時代に描かれている行進する軍隊（図2）と江戸時代に描かれている大名行列（図3）とを比較すると、大きな社会変化が起きたことに気付くきっかけになる。

学習指導要領で掲げられている資質・能力の一つである「知識」とは、「理解している」と示されている。つまり「知識」は単に歴史用語を知っているという意味ではない。教科書のタイムトラベルコーナーを使って前の時代からの大きな変化を発見し、その変化の理由が分かる（＝説明できる）ことで「知識」があると判断できる。江戸時代と明治時代との間には、「欧米諸国における『近代化』」（教科書p.148～159）という小单元がある。小学校では学ばないこの小单元を生かして单元全体を理解していくことが重要になる。この小单元で、当時の日本と欧米諸国との違い及び現在の日本との共通点を整理しておく、18世紀の欧米の市民革命・産業革命がその後の日本に大きな影響を与えたことを理解できる。これをプロジェクト型の活動で行えば、プロジェクトの進行過程や



図1 『社会科 中学生の歴史』p.168 「SILK」と書かれた荷物

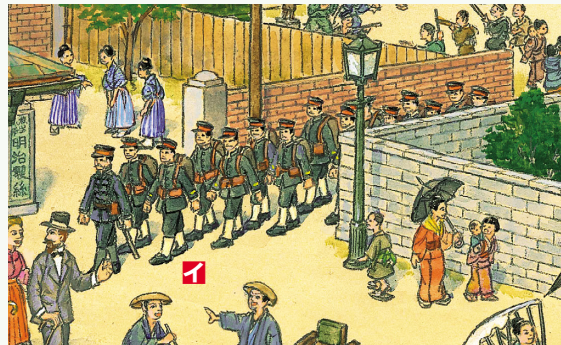


図2 『社会科 中学生の歴史』 p.168 軍隊の行進



図3 『社会科 中学生の歴史』 p.122 大名行列

作品の制作過程から生徒の追究意欲の変化に気付くことができる。それは生徒が他者との関係（＝学び合い）の中で無意識のうちに相互に形成的評価を行うことによって生じた変化である。タイムトラベルコーナーを単元の最初に見たときと最後に見るときとで、生徒たち自身が見方・考え方の深化に気付くようなプロジェクトに取り組ませたい。民主社会を形成する市民を育てる社会科だからこそ、生徒たち自身が対話によって民主的な学び合いのチームとなっていくための働きかけ（ファシリテート）をしていくことを、教師は心がけたい。こうした指導改善のための形成的評価が、生徒の民主的な態度（＝主体性）の育成につながる重要な評価方法なのである。